歴史こぼれ話

日本海海戦を転機とした男たち 6

佐藤鉄太郎——戦史研究の大家となった〝もう一人の天才〟

佐藤鉄太郎（写真：近現代PL／アフロ）

「敵の頭を押さえましょう」

日本海海戦の最中、第二艦隊の参謀・佐藤鉄太郎が発した言葉です。それが、「独断専行」ともいわれる第二艦隊の奮闘のはじまりでした。

日本海海戦時の参謀というと秋山真之が有名ですが、佐藤も同じく、天才と称された人物です。

佐藤の出身は、戊辰戦争で朝敵とされた出羽庄内藩（現在の山形県鶴岡市）。そのため、地元では「中央嫌い」の気風があり、もともと軍人になりたかった佐藤は誰にも告げず学校を抜け出し、上京したといいます。

苦労の末に海軍兵学校を卒業した佐藤は、日清戦争に砲艦「赤城」の航海長として参加。日清戦争後、イギリス、アメリカに駐在武官として滞在し、海軍史に関する調査研究に没頭しました。

帰国後、佐藤は『帝国国防論』を上梓。日本の地勢上、海上の防備を重視すべきであると主張しました。

そして、来る日本海海戦。敵前回頭を敢行し、バルチック艦隊の旗艦「スワロフ」を捉えながら並航して攻撃していた連合艦隊ですが、攻撃開始から二十分後、スワロフが北へ回頭します。東郷平八郎司令長官率いる第一艦隊は、敵艦隊が北へ逃走を図ると予想。「左八点斉動（左九十度一斉回頭）」の信号を出しますが、これに危惧を抱いた佐藤は、思わず「いけない」と叫びます。

というのも佐藤は、スワロフは舵の故障で隊列から外れただけだ、と推察していたからです。スワロフを追いかけては、他の敵艦は東へ逃げてしまう——。そう考えた佐藤は、上村彦之丞長官に、第二艦隊は第一艦隊に従うことなく、敵の頭を押さえるべきと進言します。

上村はすぐに「よかろう」と「独断専行」を決意、第二艦隊旗艦「出雲」の伊地知季珍艦長も「面舵（右への変針）」を発令。佐藤の読みは見事的中し、敵艦の追撃に成功するのです。

日露戦争後も、佐藤は「海主陸従」の国防理論を展開し、戦史研究の大家となります。そして『帝国国防史論』などを世に送り出すことで、海軍を強化しやすい環境の醸成に一役買いました。それを踏まえると、佐藤は日本海海戦の勝利だけでなく、海軍の発展にも貢献したといえるのではないでしょうか。

日本海海戦で旗艦として戦った戦艦「三笠」は、大正15年（1926）に記念艦となり、現在の位置に固定されました。

「三笠」入口で「本誌を見た」と言われた方は入艦料を100円値引きします（一般のみ）。

入艦料

員数＼区分	一般	シニア	高校生
1名	600円	500円	300円
20名以上	500円	500円	200円

観覧時間

4月～9月	3月・10月	11月～2月
9:00～17:30	9:00～17:00	9:00～16:30

船の上の歴史ミュージアム
世界三大記念艦「三笠」
〒238-0003 神奈川県横須賀市稲岡町82-19
●京浜急行「横須賀中央駅」から徒歩15分　●JR「横須賀駅」から三笠循環バスで「三笠公園」下車
TEL.046-822-5225　https://www.kinenkan-mikasa.or.jp/